

「個人的所有の再建」と「社会的所有」：
『1861-1863年草稿』での覚え書を手掛かり
に

OTANI, Teinosuke / 大谷, 禎之介

(出版者 / Publisher)

法政大学経済学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

経済志林 / The Hosei University Economic Review

(巻 / Volume)

61

(号 / Number)

4

(開始ページ / Start Page)

283

(終了ページ / End Page)

311

(発行年 / Year)

1994-02-25

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00008576>

Teinosuke Otani: The "Re-establishment of the Individual Property" and the "Social Property"

KEIZAI-SHIRIN (The Hosei University Economic Review), Vol.61, No.4
Hosei University, Tokyo, Japan, 1994

「個人的所有の再建」と「社会的所有」

— 「1861-1863年草稿」での覚え書を手掛りに —

大谷 禎之介

目次

はじめに

1. 資本主義的生産による「生産諸条件にたいする個々人の占有」の否定
2. 資本の止揚による「生産手段にたいする労働者の社会的占有」の顕現
3. 「個別的所有から社会的所有への通り道としての資本主義的所有」
4. 「資本家の他人所有」から「連合した社会的個人の所有」へ
5. 「物神崇拜の解消」

おわりに

はじめに

東欧およびソ連の「現存社会主義」のシステムの崩壊は「20世紀社会主義の壮大な実験の終焉」であったとする〈常識〉は、かの「現存社会主義」の経済的構造が「社会主義」のそれであり、それが社会主義的な社会構成体であった、という前提に立っている。

この地上に始めて「社会主義」の国が生まれた、と確言したのは、1920年代から、一方で農業の集団化と5ヵ年計画とを通じて強行的蓄積と生産諸条件の国家への集中とを押し進め、他方でソヴェトの完全な形骸化による労働者民主主義の圧殺と膨大な数の人民の追放・抹殺とによって党・国

家官僚による国家権力の掌握を実現したスターリンであり、それは1936年のことであった。それ以来、ソ連ではもちろんのこと、ソ連のシステムを敵視し、その瓦解を望んでいた西側の人びとも一般に、ソ連の社会システムの基本的構造は「社会主義」なのだと考え、ソ連を「社会主義国」と呼んできた。「国家社会主義」と呼ぼうと、「国権社会主義」と呼ぼうと、「兵営社会主義」と呼ぼうと、ソ連がなんらかの意味で「社会主義」であるとする人びとは、資本主義と異なる新たな社会システムがソ連に存在したのだと主張するかぎりでは、1936年のスターリンの宣言を追認しているのである。

どのように「歪められて」いようと、ソ連はやはり「社会主義」だった、と考えている多くの人びとにとって、最も確実に思われるその論拠は、ソ連では、生産手段の私的所有が廃止され、その「社会的所有」が成立していた、というものである。

「社会的所有」とはどのような「所有」であろうか。党・国家官僚が完全に国家権力を掌握しており、労働する諸個人は、党・国家イデオロギーと恐怖とによる強力な国家統制のもとで、党・国家官僚によって作成された計画にもとづいて労働する以外に、国家に属する生産手段と結合することができない、という社会でも、「国有」とは基本的には——もろもろの留保をつけるにしても——「社会的所有」なのであろうか。

「社会的所有」という概念が「社会主義」の核心であると考えられているのは、言うまでもなく、マルクスの「社会主義」がそのようなものと見なされているからであり、また、「国有」が「社会的所有」であると考えられているのは、『共産党宣言』や『空想から科学へ』ではそのように書かれている、と読まれているからである。『資本論』第1部現行版の「第24章 資本の本源的蓄積」の「第7節 資本主義的蓄積の歴史的傾向」（以下、本稿ではたんに「第24章第7節」と呼ぶ）での「個人的所有の再建」の解釈についてさまざまな論議がたたかわされてきた底流には、つねに、「個人的所有」なるものをこの「社会的所有」との関連でどのように

とらえるべきか、という問題意識があったことは確かであろう。

ところで、『1861-1863年草稿』のノート第21冊には、この第24章第7節でマルクスが「個人的所有」および「社会的所有」という言葉でどのようなことを考えていたのか、ということについて、きわめて有力な手掛りを与える一節がある。それは、ノート第21冊の1309-1310ページに書かれている、その前後の「資本のもとへの労働の形態的包摂と実質的包摂、過渡諸形態」にかんする本文とは区別するための角括弧に括られた一つの覚え書である（以下、本稿ではこの一節をたんに「覚え書」と呼ぼう）。ノートのこの付近は1863年5月に書かれたものと推定されている。マルクスはのちに、この覚え書に先行する部分の一部を、切り貼りしたり書き写したりして、1863年夏から1864年夏までに書かれたものと推定されている『資本論』第1部の最初の清書稿の一部である「第6章 直接的生産過程の諸結果」に利用した。このことを考えれば、彼が『資本論』第1部の最初の清書稿を書くさいにこの覚え書を読み返したことはほとんど確実である¹⁾。

本稿では、この覚え書の内容を逐一検討し、それが第24章第7節の内容の理解に示唆を与えると考えられる諸点を指摘することを通じて、マルクスにおける「個人的所有の再建」および「社会的所有」の意味を明らかにする。もとより、この作業は、一方では「現存社会主義」における「所有」について直接に論じるものではないし、他方ではそもそも「所有」とはどのようなものであるか、という論点に踏み入るものでもないが、それらの議論でも当然に踏まえらるべきこれらの概念の内容を明確化することによって、「現存社会主義」は「社会的所有」の確立した「社会主義」だ、という〈常識〉の再検討に素材を提供することにしたい。

まずはじめに、この覚え書の全文を掲げておこう²⁾。なお、覚え書の左の欄外に太い縦線が引かれており、さらにその左に「社会的労働の対立的な形態」と記されている。

「[ここでの積極的な成果は、増大した量の生活手段を生産するため

に必要とされる労働時間が減少するという、こうした成果が労働の社会的形態によって達成されるのだということ、そして、生産諸条件にたいする個々人の占有〔Besitz des Einzelnen〕は、不必要なものとして現われるだけでなく、この大規模生産とは相いれないものとして現われる、ということである。資本主義的生産様式では、もちろんこのことは、資本家——非労働者——がこの社会的大量の生産手段の所有者である、というかたちで現われるのである。資本家は実際には、労働者たちにたいして、彼らの結合、彼らの社会的統一を代表しているにすぎない³⁾。だから、この対立的な形態がなくなれば、その結果生じるのは、労働者たちがこの生産手段を、私的諸個人としてではなく社会的に占有している〔besitzen〕、ということである。資本主義的な所有とは、ただ、生産諸条件にたいする（したがって生産物にたいする、というのは生産物はたえず生産諸条件に変わっていくのだから）労働者たちのこのような社会的所有——すなわち否定された個別的所有——の対立的表現でしかないのである。同時に明らかになるのは、このような転化は物質的生産諸力の一定の発展段階を必要とする、ということである。たとえば小農民にあっては、彼のわずかの耕地は彼のものである。それを自分の生産用具として所有することは、彼の労働にとっての必要な刺激であり条件である。手工業の場合にも同様にそうである。大農業でも大工業でも、この労働と生産諸条件の所有とは、はじめて分離されなければならないのではなくて、それらは実際に分離しているのであって、シスモンディが嘆いているこうした所有と労働との分離は、生産諸条件の所有が社会的所有に転化するための避けることのできない通り道なのである。個々の労働者が個々人として生産諸条件を所有している状態が再建されることがありうると思えば、それはただ、生産力と大規模労働の発展とが解体されることによってでしかないであろう⁴⁾。この労働にたいする資本家の他人所有が止揚されることができるのは、ただ、彼の所有が変革され

て、自立的個性性にある個別者ではない者の所有、つまり連合した、社会的な個人の所有としての姿態をとることによってだけである⁵⁾。もちろんそれと同時に、生産物は生産者の所有物⁶⁾なのだ、という物神崇拜はなくなり、資本主義的生産の内部で発展する、労働の社会的形態のすべてが、これらを歪曲して対立的に表わす対立から解放される。この対立は、たとえば労働時間の短縮を、全員が6時間労働するようになる、というように表わすのではなく、6人が15時間労働すれば20人を養うのに足りるようになる、というように表わすのである。】(MEGA, II/3.6, S.2144-2145, 『資本論草稿集』⑨, 1994年, 389-390 ページ)

以下、この覚え書を五つの部分に区切り、第24章第7節の記述を随時対照させながら、その内容を見て行くことにしよう。

- 1) ただし、覚え書の前後のパラグラフには利用済みのしるし〔Erledigungs-vermerke〕がつけられているのに、覚え書の部分にはこれがない。このことは、おそらくマルクスが、覚え書の内容を第1部の原稿に書き写すというしかたでこの部分を直接に利用したのではなかったことを意味するであろう。これは、覚え書と第24章第7節とが、覚え書に手を入れていって最終的に現行第24章第7節ができあがった、といった直接的な関係にあるのではないことを示唆している。
- 2) 本稿での訳文は、『資本論草稿集』⑨(大月書店, 1994年3月)でのそれと同じである。以下、すべての引用において、原文での強調を傍点で、筆者による強調を下線で示すことにする。
- 3) 「にすぎない」——MEGAでは、nie(のではけっしてない)となっているが、nurの解説の誤りだと考えられる。
- 4) この一文は、MEGAでは、„Als Einzelner konnte der einzelne Arbeiter nur wieder hergestellt werden in dem Eigentum der Produktionsbedingungen durch Zertrennung der Productivkraft und der Entwicklung der Arbeit auf grosser Stufenleiter.“となっているが、イタリック体にした konnte は könnte とあるべきところと考えて訳出してある。
- 5) この一文の原文は次の通りである。„Das fremde Eigentum des Capitalisten an dieser Arbeit nur aufzuheben indem sich sein Eigentum als

das des Nicht-Einzelnen in seiner Selbstständigen Einzelheit, also des associirten, gesellschaftlichen Individuums umgestaltet.“

- 6) この「所有物」という語は、MEGA では Eigentümer (所有者) となっているが、Eigenthum の誤記と考えて訳してある。

1. 資本主義的生産による「生産諸条件にたいする 個々人の占有」の否定

「ここでの積極的な成果は、増大した量の生活手段を生産するために必要とされる労働時間が減少するという、こうした成果が労働の社会的形態によって達成されるのだということ、そして、生産諸条件にたいする個々人の占有 (Besitz des Einzelnen) は、不必要なものとして現われるだけでなく、この大規模生産とは相いれないものとして現われる、ということである。」(覚え書)

まず、「ここでの積極的な成果」として三つのことがあげられている。「ここでの」というのは、角括弧で括られたこの覚え書に先行する部分のことであって、内容的には、資本のもとで生産様式そのものが変革されて「独自に資本主義的な生産様式」が成立している「資本のもとへの労働の実質的包摂」についての記述を指している。

その「積極的な成果」としてまず挙げられているのは、「増大した量の生活手段を生産するために必要とされる労働時間が減少ということ」である。ここで、たんに「生産物」と言わずに、とくに「生活手段」と言っているのは、「独自に資本主義的な生産様式」による労働生産力の上昇が「生活手段」の価値を引き下げることによって剰余価値率を上昇させること、つまり相対的剰余価値の生産が念頭におかれているからである。この「生活手段」という語から、この覚え書で問題になるのは「生活手段」ないし消費対象だと考えることはできないし、いわんや、この語か

ら、これ以下のところで諸個人の「生活手段」ないし消費対象の「所有」が論じられるのだと考えることはできない。

「成果」として次に述べられているのは、「こうした成果が労働の社会的形態によって達成されるのだということ」である。ここでの「労働の社会的形態」とは、言うまでもなく、労働が資本主義的生産のもとですでに受け取っている形態であって、労働過程が、労働する諸個人の社会的結合のもとづき、大量の生産手段（機械装置）を駆使する過程となっていることを意味している。

そのうえで、さらに「成果」として、「生産諸条件にたいする個々人の占有は、不必要なものとして現われるだけでなく、この大規模生産とは相いれないものとして現われる」ことが述べられている。いま見た、資本のもとでの労働の実質的包摂の段階ではじめて成立する労働過程による「大規模生産」は、もちろん、それに先行する、労働する諸個人が単独に生産諸条件＝生産手段を占有して労働している状態、すなわち小経営的生産様式とは「相いれない」ものであって、これの否定のうえになりたつものである。ここでの「生産諸条件にたいする個々人の占有」が、小経営的生産様式における単独の個人による占有を指していることは明らかであろう。

第24章第7節では、小経営が「大規模生産」と「相いれない」ことについて、次のように書かれている^{1) 2)}。

「この生産様式は、土地やその他の生産手段の分散を想定する。それは、生産手段の集積を排除するとともに、同じ生産過程のなかでの協業や分業、自然にたいする社会的な支配や規制、社会的生産力の発展を排除する。それは生産および社会の狭い自然生的限界としか調和しない。」(MEGA, II/5, S.608.)

要するに、この一文では、資本のもとへの労働の実質的包摂によって労働の受け取る社会的形態が相対的剰余価値の生産が促進するのであって、これは、小経営的生産様式のもとでの「生産諸条件にたいする個々人の占有」を否定するのだ、ということが述べられているのである。

- 1) 以下、とくに断らないかぎり、第24章第7節からの引用は『資本論』第1部の初版による。強調は、初版でのマルクスによるものである。
- 2) なお、次の一文をも参照されたい。

「小農民経営と独立手工業経営とは、どちらも一部は封建的生産様式の基礎をなし、一部はこの生産様式が崩壊してからも資本主義的経営と並んで現われるのであるが、同時に、それらは、原始的東洋の共同体が崩壊したあとで奴隷制が本式に生産を支配するようになるまでは、最盛期の古典的共同体の経済的基礎をなしている。」（『資本論』第1部。MEW, Bd.23, S.354. 傍点は、初版でのマルクスによるもの。）

資本主義的生産様式は、封建的生産様式の解体のうえに成立するものであり、したがって歴史的には、農奴制から資本主義的生産への直接的転化もありうるのであるが、マルクスは覚え書でも第24章第7節でも、このような転化は度外視し、資本主義的生産様式の生成をもっぱら小経営的生産様式からの転化として論じるのである。

「資本の本源的蓄積、すなわち資本の歴史的生成とは、どういうことに帰着するであろうか？ それが奴隷や農奴から賃労働者への直接の転化でないかぎり、つまりたんなる形態変換でないかぎり、それが意味するものは、ただ直接生産者の収奪、すなわち自分の労働にもとづく私的所有の解消でしかないのである。」（第24章第7節。MEGA, II/5, S.608.）

2. 資本の止揚による「生産手段にたいする労働者の社会的占有」の顕現

「資本主義的生産様式では、もちろんこのことは、資本家——非労働者——がこの社会的大量の生産手段の所有者である、というかたちで現われるのである。資本家は実際には、労働者たちにたいして、彼らの結合、彼らの社会的統一を代表しているにすぎない。だから、この対立的な形態がなくなれば、その結果生じるのは、労働者たちがこの生産手段を、私的諸個人としてではなく社会的に占有している〔besitzen〕、ということである。資本主義的な所有とは、ただ、生産諸条件にたいする（したがって生産物にたいする、というのは生産物

はたえず生産諸条件に変わっていくのだから)労働者たちのこのような社会的所有——すなわち否定された個別的所有——の対立的表現でしかないのである。」(覚え書)

社会的労働過程を前提とする独自に資本主義的な生産様式では、この過程で充用される「社会的大量の生産手段」が「資本家——非労働者——」の所有に属するものとして現われる。同時に、個々の賃労働者を一つの労働過程に結合させるのは資本であって、社会的労働の生産力または労働の社会的生産力は、資本の生産力として現われる。これは、いわば、社会的な労働過程が資本主義的生産様式のもとで必然的にまとう「外皮」である。

「資本独占は、それとともに開花しそれのもとで開花したその生産様式の桎梏となる。生産手段の集積も労働の社会化も、それがその資本主義的な外皮とは調和できなくなる一点に到達する。そこで外皮は爆破される。資本主義的私的所有の最期を告げる鐘が鳴る。収奪者が収奪される。」(第24章第7節。MEGA, II/5, S.609.)

このように社会的生産の資本主義的形態という外皮がはぎとられ、この「対立的形態」がなくなれば、労働過程における「彼らの結合、彼らの社会的統一」は、「実際には [in der That]」労働する諸個人自身の「結合」、「統一」にほかならないのだから、労働過程における彼らのこの「結合」、「統一」が、したがって「労働者たちがこの生産手段を、私的諸個人としてではなく社会的に占有している」という状態が、そのあるがままに姿を現わすことになる¹⁾。

結合した労働者による生産手段のこの「社会的占有」は、資本主義的私的所有が、したがって生産手段の所有者としての非労働者=資本家が消え去れば、同時に「生産諸条件にたいする²⁾労働者たちの社会的所有」として現われるのである。ここでは、「労働者たちがこの生産手段を、私的諸個人としてではなく社会的に占有している」ことを指して、「生産諸条件

にたいする労働者たちのこのような社会的所有」と言っているわけであるが、ここでの「社会的」の意味が、「生産諸条件にたいする個々人の占有」と対立するものであることは、ここでの「社会的所有」が「否定された個別的所有〔Einzeleigentum〕」と言われているところからも、明らかであろう。ここでの対比の主要な側面は、私的所有と社会的所有とのそれではなくて、「個々人の占有」ないし「個別的所有」と「社会的占有」ないし「社会的大量の生産手段の所有」とのそれなのである。叙述の力点は、「資本主義的私的所有」と「社会的所有」とが「対立」しているところにあるのではなく、「資本主義的な所有」が、「対立的」にはあるが、すでに「社会的所有」を表現しているのだ、というところにある。ここでの「社会的所有」は、「資本主義的な所有」の否定によってはじめて成立するものとしてではなく、「資本主義的な所有」の否定によって、これのなかに潜在的に包含されていたものがあるがままに姿を現わすもの、として述べられているのである。

- 1) 「資本家は実際には、労働者たちにたいして、彼らの結合、彼らの社会的統一を代表しているにすぎない」という文は、第24章第7節での、「事実上〔第3版で、faktisch から tatsächlich に変更された〕すでに社会的経営〔第3版で、「生産手段の社会的収奪」から「社会的経営」に変更された〕にもとづいている資本主義的所有〔第3版で、「私的所有」が「所有」に変更された〕という表現を想起させる。ここで重要なのは、独自に資本主義的な生産様式では、一方では、資本が多数の労働力を一つの労働過程に結合し、この過程の監督者が同時に指揮をすることによって、労働の社会的生産力が資本の社会的生産力として現われざるをえないが、他方では、労働過程から資本主義的形態が剥ぎ取られれば、労働の社会的生産力はそのあるがままに姿を現わすことになるのであって、監督者は消え去り、労働する諸個人とは区別されそのうえにたつ指揮者も不必要となる、ということである。「現存社会主義」ではもちろん、そのような監督かつ指揮者（ノメンクラトゥーラ）なしにはすまない。それは、社会主義にあっても社会的労働は労働する諸個人とは区別される特別な指揮者層を必要とする、ということを示すものではなくて、「現存社会主義」が資本主義にほかならないことを示すものである。

- 2) マルクスがここに「(したがって生産物にたいする、というのは生産物はたえず生産諸条件に変わっていくのだから)」と書き入れていることに注目されたい。覚え書でマルクスは徹底して、生産手段ないし生産諸条件の占有、所有を問題にし、生産物の所有(取得)は度外視している。この書き入れはこのこと理由を明示しているのである。

3. 「個別的所有から社会的所有への通道としての資本主義的所有」

「同時に明らかになるのは、このような転化は物質的生産諸力の一定の発展段階を必要とする、ということである。たとえば小農民にあっては、彼のわずかの耕地は彼のものである。それを自分の生産用具として所有することは、彼の労働にとっての必要な刺激であり条件である。手工業の場合にも同様にそうである。大農業でも大工業でも、この労働と生産諸条件の所有とは、はじめて分離されなければならないのではなくて、それらは実際に分離しているのであって、シモンディが嘆いているこうした所有と労働との分離は、生産諸条件の所有が社会的所有に転化するための避けることのできない通道なのである。個々の労働者が個々人として生産諸条件を所有している状態が再建されることがありうるとすれば、それはただ、生産力と大規模労働の発展とが解体されることによってでしかないであろう。」(覚え書)

「同時に明らかになる〔sich zeigen〕」というのは、この覚え書のなかの直前で言われていることと「同時に」というのではなく、資本のもとへの労働の実質的包摂までの展開のなかで明らかになる、ということであろう。他方、「このような転化〔diese Verwandlung〕」ということでマルクスが考えているのは、もちろん、この覚え書のなかの直前の部分に含まれているのでなければならない。

それは、単独の労働者による個別的占有および個別的所有から労働者による社会的占有および社会的所有への転化である。この転化は、生産手段の自己労働にもとづく私的所有から生産手段の資本主義的私的所有への転化によって開始されるが、しかしそれと一致するわけではない。生産手段の資本主義的私的所有から生産手段の社会的所有への転化が、この転化を完成する。資本主義的私的所有は労働者による生産手段の社会的占有および所有を対立的な形態で含んではいないが、まだそれを顕在化させていない。それを顕在化させるのが、資本主義的私的所有の否定である。そのかぎり、この「転化」は、自己労働にもとづく私的所有から資本主義的私的所有を経て社会的所有にいたる過程の全体を意味することになるが、しかし、これまでの記述から読みとれるように、ここでの眼目は、「私的」なものから「社会的」なものへの転化ではなくて、「個別的」なものから「社会的」なものへの転化なのである。そこで、ここではまず、このような個別的占有から社会的占有への転化が「物質的生産諸力の一定の発展段階を必要とする」ことが述べられているのである。

第24章第7節でこれに対応するのは、小経営的生産様式について述べられた次の箇所である。

「ある程度の高さに達すれば、この生産様式は、自分自身を破壊する物質的手段を生みだす。この瞬間から、社会の胎内では、この生産様式を桎梏と感ずる力と熱情とが動きだす。この生産様式は滅ぼされなければならないし、それは滅ぼされる。その絶滅、個人的で分散的な生産手段の社会的に集積された生産手段への転化、したがって多数人の矮小所有の少数人の大量所有への転化、したがってまた民衆の大群からの土地や生活手段や労働用具の収奪、この恐ろしい重苦しい民衆収奪こそは、資本の前史をなしているのである。」(MEGA, II/5, S.608.)

覚え書では続いて、小経営的生産様式とそこでの所有がどのような「物質的生産諸力の一定の発展段階」に対応しているのかについて次のように

述べている。「たとえば小農民にあっては、彼のわずかの耕地は彼のものである。それを自分の生産用具として所有することは、彼の労働にとっての必要な刺激であり条件である。手工業の場合にも同様にそうである。」

第24章第7節は、この点について、次のように述べている。

「労働者が自分の生産手段を私的所有しているということは小経営の基礎であり、小経営は社会的生産と労働者自身の自由な個性との発展のための一つの必要条件である。たしかに、この生産様式は、奴隷制や農奴制やその他の従属諸関係の内部でも存在する。しかし、それが繁栄し、全精力を発揮し、十分な典型的形態を獲得するのは、ただ、労働者が自分自身の取り扱う労働条件の自由な私的所有者である場合、すなわち農民は自分が耕す畑の、手工業者は彼が老練な腕で使いこなす用具の、自由な私的所有者である場合だけである。」
(MEGA, II/5, S.608.)

ここで強調されるべき要点は二つある。

第1に、生産手段を「自分の生産用具として所有することは、彼の労働にとっての必要な刺激であり条件である」ということである。これは、「小経営は社会的生産と労働者自身の自由な個性との発展のための一つの必要条件である」(第24章第7節、同前)、ということ、そしてとくにフランス語版の文章がさらに明解に示しているように、「この小経営は社会的生産の苗床であり、労働者の手の熟練や巧妙や自由な個性が練り上げられる学校である」、ということである¹⁾。

第2に、ここでは、労働も私的かつ個別的であり、生産手段の所有も同じく私的かつ個別的であって、両者が完全に対応している、ということである。ここには、「所有と労働との分離」はまだ存在しない。

これにたいして、「民衆の大群からの土地や生活手段や労働用具の収奪、この恐ろしい重苦しい民衆収奪」という前史を経て成立した資本主義的生産様式のもとでは、労働者は労働諸条件から完全に切り離されて「貧困、抑圧、隷属状態、退化、搾取」のもとに置かれ、所有と労働とはすでに完

全に分離している。このことが、「大農業でも大工業でも、この労働と生産諸条件の所有とは、はじめて分離されなければならないのではなくて、それらは実際に分離しているのであって、シスモンディが嘆いているこうした所有と労働との分離は、生産諸条件の所有が社会的所有に転化するための避けることのできない通り道〔Durchgang〕なのである」と述べられているのである。

シスモンディへの言及は、第24章第7節では注251に対応しているのであり、この注では、「われわれはあらゆる種類の所有をあらゆる種類の労働から分離しようとしている」という箇所が引用されている。言うまでもなく、この箇所でシスモンディに言及しているのは、資本主義的生産における「所有と労働との分離」を嘆き、「所有と労働との統一」を回復するために資本主義的生産を小商品生産に引き戻そうとする、彼の「小ブルジョア的社会主义」²⁾を批判するためである。そのことは、続く部分で明示的に示されることになる。すなわち、「個々の労働者が個々人として生産諸条件を所有している状態が再建されることがありうるとすれば、それはただ、生産力と大規模労働の発展とが解体されることによってでしかないであろう。」

「個々の労働者が個々人として生産諸条件を所有している状態」とは、もちろん「個別的所有」のことであって、資本主義的な所有から「個別的所有」への逆行は、物質的生産諸力の発展段階を逆転させること、すなわち資本主義的形態のもとでの「生産力と大規模労働の発展」を解体させることなしにはありえないことがここで述べられているのである。

第24章第7節では、この点については、第3版で、ペクルの言葉を引き合いに出しながら、次のように書き加えている。「この生産様式を永久化するのには、ペクルが適切に言っているように、「万人の凡庸を命令する」ことであろう。」(第3版のためのマルクスの指図書による。MEGA, II/8, S.19.)³⁾

要するに、ここでは資本主義的生産が、したがってまた資本主義的な所

有が、「個別的所有」から「社会的所有」への不可避の「通り道」、必然的な「通過点」であることが強調されているのである。

なお、ここで、「個別的所有」が「再建されることがありうるとすれば」という箇所原文が *wieder hergestellt werden könnte* となっていることにも注目しておかれない。

さて、以上のように見てくれば、この覚え書の主題と内容とが第24章第7節のそれらと基本的に重なっていることは、まったく明らかである。このことを確認しておいたうえで、続く一文を見よう。

- 1) この点については、拙稿「労働を基礎とする社会把握と経済学の課題」、『経済志林』第61巻第1号、1993年4月、84、112、119ページ、およびマルクス『経済学批判要綱』、MEGA, II/1.2, S.499、『資本論草稿集』②、340ページ、をも参照されたい。この観点は、後述する「個人的所有の再建」の基本にかかわるものである。
- 2) シスモンディの「小ブルジョア社会主義」については、次の文を参照されたい。

「こうして、小ブルジョア社会主義が生まれた。シスモンディは、フランスばかりでなくイギリスにとっても、この種の文筆家の首領である。……その積極的な内容からみれば、この社会主義は、古い生産手段と交易手段とを復活させ、それとともにまた古い所有関係と古い社会を復活させようとするものであるか、でなければ、近代的な生産手段と交易手段とを、それらによって爆破された、また爆破されざるをえなかった古い所有関係の枠のなかに、ふたたびむりやり閉じこめようとするものであるか、そのいずれかである。どちらの場合にも、それは反動的であり、同時に空想的である。」(マルクス=エンゲルス『共産党宣言』。MEW, Bd.4, S.484-485、『マルクス=エンゲルス全集』第4巻、邦訳、498-499ページ。)

- 3) なお、引用されているペクルの原文の全体は次のようなものである。
「農業の、商業の、そして製造業の細分状態を永久化することを云々するなら、それは文明の死であり、万人の凡庸を命令することである。」(MEGA, II/8, S.1362. 強調はペクル。)

4. 「資本家の他人所有」から「連合した社会的個人の所有」へ

「この労働にたいする資本家の他人所有が止揚されることができるのは、ただ、彼の所有が変革されて、自立的個別性にある個別者ではない者の所有、つまり連合した、社会的な個人の所有としての姿をとることによってだけである。」(覚え書)

見られるように、ここでは、資本主義的生産様式が協働連合的生産様式〔associierte Produktionsweise〕に転化することによって、資本主義的な私的所有がどのような所有に姿を変える〔sich umgestalten〕かについて述べているのである。ここではそれが、なによりも所有の主体に即して言われている。すなわち、「資本家」の他人所有が、「自立的個別性にある個別者ではない者〔das Nicht-Einzelne in seiner Selbständigen Einzelheit〕」すなわち「連合した、社会的な個人〔das associierte, gesellschaftliche Individuum〕」の所有に姿を変える、と言うのである。

第24章第7節でこの部分にあたるのは、言うまでもなく、いわゆる「個人的所有の再建」をめぐる論争¹⁾が行なわれてきた次のパラグラフである。周知のように、マルクスは初版および第2版でのこのパラグラフの文章を、フランス語版によって改訂するように指示を残しており、現行版の文章は、この指示にもとづいてエンゲルスが手を加えたものである。だからここではフランス語版からの訳をかかげるが、のちに改訂の手が加えられた初版の文章でさえも、読者に誤解を与える可能性がある²⁾と判断されて改訂されることになった、ということであって、内容的にはなんの変更も行なわれていないとすることができる。

「資本主義的生産様式に適合する資本主義的取得は、したがって資本主義的私的所有も、独立した個人的労働〔le travail indépendant

et individuel) のコロラリー (corollaire) にほかならないこの私的
所有の第1の否定である。しかし、資本主義的生産はそれ自身、自然
の変態を支配する宿命によって、自己自身の否定を生み出す。これは
否定の否定である。この否定の否定は、労働者の私的所有を再建する
のではなく、資本主義時代の獲得物にもとづく、すなわち、協業と土
地を含めたあらゆる生産手段の共同占有 (possession commune)
ともとづく、労働者の個人的所有 (sa propriété individuelle) を
再建するのである。」(MEGA, II/7, S.679. 強調は、初版でのマル
クスのそれによってつけた。)

この文のなかで、第1の否定が、「独立した個人的労働のコロラリーに
ほかならないこの私的所有」、すなわち小経営的生産様式のもとでの生産
諸条件にたいする「個別的所有」の否定であって、それが「資本主義的生
産様式に適合する資本主義的取得、したがって資本主義的私的所有」をも
たらすこと、第2の否定が、生産諸条件にたいするこの資本主義的私的所
有の否定であって、それが「資本主義時代の獲得物にもとづく、すなわ
ち、協業と土地を含めたあらゆる生産手段の共同占有ともとづく、労働
者の個人的所有」をもたらすこと、このことは明らかであろう。

そこで問題は、ここではなぜ、生産手段の「社会的所有」と言わずに、
「労働者の個人的所有」と言っているのか、そしてこの「個人的所有」と
はどのような意味をもっているのか、ということになる。そして周知のよ
うに、この点をめぐって大論戦が繰り広げられてきたのである。

じつは、これまで見てきた覚え書の文章が、この問題の解決に、いくつ
かのきわめて有力なヒントを与えているように思われる。

まず第1に、第1の否定にあっても第2の否定にあっても、所有の対象
は労働諸条件、生産諸条件であって、社会的生産物のなかの、たとえば個
人的生活手段といった、特定の部分だけを指すものではまったくありえな
い、ということである。マルクスの文章とは別に独自論を展開するのであ
れば別であるが、ことマルクスの文章にかんするかぎり、『反デューリン

グ論』におけるエンゲルスの解釈と、それにもとづく、あるいはそれを支持する、レーニンのそれを含む多くの議論が成立しえないことはまったく明らかである。

第2に、「個人的所有」が生産手段=生産諸条件にかかわるとしても、それが「個人的」であるのは生産物の取得〔Aneignung〕についてなのだ、という解釈も成立する余地がないということである。マルクスはここでは、徹底して、生産諸条件そのものの「所有」を論じているのである。

もちろん、覚え書での「連合した、社会的な個人の所有」は、直接には、生産諸条件あるいは生産手段について言われているが、そうであるがゆえに、それは当然、一切の生産物にたいする、そしてまたその一部である個人的生活手段にたいする「連合した、社会的な個人の所有」を含むものである。

マルクスは『資本論』第1部第1章第4節で次のように書いている。

「共同の生産手段で労働し自分たちのたくさんの個人的労働力を自覚的に一つの社会的労働力として支出する自由な人々の連合を考えてみよう。……この連合の総生産物は、一つの社会的生産物である。この生産物の一部はふたたび生産手段として役立つ。それは相変わらず社会的である。しかし、もう一つの部分は連合の成員によって生活手段として消費される。それは彼らのあいだに分配されなければならない。……労働時間は、同時に、共同労働への生産者の個人的参加の尺度として役立つ、したがってまた共同生産物のうちの個人的に消費される部分における生産者の個人的な分け前の尺度として役立つ。」

(MEW, Bd.23, S.92-93. 傍点は初版でのマルクスによるものであり、下線は引用者によるものである。)

これは、「各生産者の手にはいる生活手段の分けまえが各自の労働時間によって規定されている」いわゆる「共産主義の第一段階」についてのものであるが、生活手段が個人的に分配・消費される点では、「第二段階」にも同じように妥当する。見られるように、「共同の生産手段で労働し自

分たちのたくさんの個人的労働力を自覚的に一つの社会的労働力として支出する自由な人々の連合」のもとでの、労働および生産の前提としての生産手段にたいする「連合した社会的個人の所有」は、当然に、このような生産物の社会的取得（「この連合の総生産物は一つの社会的生産物である」）とそのうちの個人的消費手段の個人的分配と消費とを含むのであって、それを排除するはずがない。

しかし、覚え書で言う「連合した、社会的な個人の所有」が、生産の諸条件、したがって生産手段について言われているものであって、直接には生産物について言われているものでないことは明らかであろう。

第3に、協働連合的生産様式における新たな所有が「社会的所有」であるのは、まずなによりも、小経営的生産様式に見られるような「個別的所有」に対立するものであって、社会的労働の生産力という物質的生産諸力の高度の発展段階に対応する生産諸条件の社会的占有を実現するものなのだ、ということである。さきのフランス語版での、「資本主義時代の獲得物にもとづく、すなわち、協業と土地を含めたあらゆる生産手段の共同占有ともとづく……所有」も、ドイツ語現行版での、「資本主義時代の成果を、すなわち、協業、および、土地と労働そのものによって生産される生産手段との共同占有を基礎とする……所有」も、ともに、まさにこの意味での「社会的所有」を意味している。だから、新たな所有について、マルクスは「個人的所有」だけを言っていたのではなくて、それが同時に「社会的所有」でもあることを、この箇所で明言していたのだと言わなければならない。

そのうえで、第4に、なぜ「個人的所有の再建」なのか、という点である。

まず、「再建する〔wieder herstellen〕」というのは、明らかに、かつて存在していたものがいったん失われ、それがここでふたたび打ち立てられるということの意味している。それでは、かつて存在したが失われてしまった「個人的所有」とは、なんであったか。それはまさに、「自立的個

別性にある個別者」が、「個々の労働者が個々人として生産諸条件を所有している状態」である。もちろん、シスモンディらの願望にもかかわらず、それがそのままのかたちで「再建される」ことはありえない。それでは、それがふたたび打ち立てられるとはどういうことか。それは、資本主義的私的所有のもとでいったん失われた、労働する諸個人自身の所有、労働する諸個人と労働諸条件との結合、労働と所有との統一が、協働連合的生産様式のもとで回復されるということ以外にはありえない。それはまさに、「連合した社会的個人の所有」によって実現されるのである。この個人が「自立的個別性にある個別者ではない者」である点でこの「再建」はもとの状態へのたんなる「復帰」でないことは明らかであるが、しかし他方で、「資本家——非労働者——による生産手段の所有」の否定によって、労働する諸個人がふたたび生産諸条件を占有し所有している状態が再現するというかぎりでは、それはまさに「再建」なのである。このように見ることができるとすれば、「個人的所有〔das individuelle Eigentum, la propriété individuelle〕」という語は、所有が「社会的」でなくて「個人的」だ、ということを行っているのではなくて、所有の主体が非労働者ではなくて労働する個人だ、ということを行っている、ということになる。要するに、「個人的所有の再建」とは、「連合した、社会的な個人による所有」の再建なのである²⁾。

そこで、新たな形態への移行は、一方で「社会的所有」への移行であり、他方で「個人的所有」への移行なのであるが、それではなぜ、「社会的所有」とせずに「個人的所有」としたのか。

もし「社会的所有」としたならば、それは、資本主義的私的所有に対立的に、あるいは潜在的に含まれていたものがここで顕在化する、あるがままに姿を現わすということであるから、それは「否定の否定」ではありえないからだ、と考えられる。

たしかに、原始共産制、共同体的生産様式のもとには「共同所有」（共有）があった。所有とは、本源的には、労働する諸個人が労働諸条件にた

いして、自己に属するものにたいする様態で関わることであって、それは自然生的な共同体組織〔Gemeinwesen〕によって媒介された共同所有であった。そしてそれに対立するものとして私的所有が発生し、資本主義的私的所有において最高度に発展した。そして協働連合的生産様式において、私的所有が廃棄され、ふたたび生産手段の共同所有が成立する。そのかぎりでは、資本主義的所有から新たな所有への転化は、共有→私有という第一の否定にたいする、私有→共有という否定の否定である。この点から見るかぎり、かつて本源的な共同体組織で見られた共同所有が、協働連合的生産様式のもとで「再建」されるのだと言うことができる。共同所有がその否定の否定によって「再建」される、というこの歴史把握は、それ自体としては、人類史を弁証法的発展の過程として理解するためのきわめて重要な観点である。

しかしながら、第24章第7節で述べられている「否定の否定」がこのような意味での「否定の否定」であるとはどうい考えられない。

ここには2箇所「社会的所有」という語があるが、その最初のケースは、現行版第2パラグラフの、「社会的、集团的所有の対立物としての私的所有」という表現であって、この部分は、第3版でマルクスがフランス語版によって挿入するように指示したのにもとづいてエンゲルスがドイツ語にした部分であるが、じつはフランス語版には、「社会的」という語はなかったのであって、エンゲルスが自分の判断で挿入した語だったのである。第2のケースは、最後のパラグラフにおける、「諸個人の自己労働にもとづく分散的な私的所有から資本主義的な私的所有への転化は、もちろん、事実上すでに生産手段の社会的収奪〔第3版で「社会的経営」に修正）にもとづいている資本主義的私的〔第3版で「私的」を削除〕所有から社会的所有への転化に比べれば、比べものにならないほど長くて困難な過程である」というところに見られる「社会的所有」である。これは、初版では「資本主義的私的所有」に対置されていたのであるが、ここでも、後者が「事実上すでに社会的経営にもとづいている」からこそ、この

転化は「長くて困難な過程」ではないと言われるのである。しかも、この転化に対比されているのは、社会的所有から私的所有への転化ではなくて、「諸個人の自己労働にもとづく分散的な私的所有から資本主義的な私的所有への転化」だったのである³⁾。

このように見てくれば、第24章第7節での「否定の否定」は、社会的所有→私的所有→社会的所有ではありえず、それは、「自立的個別性にある個人の所有」→「非労働者による他人所有」→「連合した社会的個人による所有」であるほかないことは明らかであろう。

そこで第5に、協働連合的生産様式における所有が「社会的所有」であるのは、「個人」と区別される「社会」なるものが所有の主体だからなのではない、ということが強調されなければならない。資本主義的な所有から「社会的所有」への移行とは、それ自体としては、「社会」なるものが生産手段の「所有権」を個々の資本家から奪うことではないのである。いわんや、「社会」という名において「国家」が社会的生産手段を掌握することではありえない。「社会的所有」への移行とは、「資本主義時代の獲得物」（資本主義的生産のもとですでに実現されているもの）、すなわち「協業と土地を含めたあらゆる生産手段の共同占有」を基礎にして、「労働者たちがこの生産手段を、私的諸個人としてではなく社会的に占有している」状態をそのあるがままに顕在化させることである。あるいは、「事実上すでに社会的経営にもとづいている資本主義的所有」から、「資本主義的所有」の外皮を爆破して、その社会的経営を名実ともに「社会的経営」たらしめることである。そのために必要なのが、この「共同占有」にもとづく「労働者の個人的所有の再建」なのである。

多数の個々の資本家、少数の個々の資本家、さらに多数の株主を共同所有者とする少数の株式資本の手から、連合した社会的諸個人の手への生産手段の移行の過程は、当然に、「民衆による少数の横領者の収奪」であり、「国有化」がその一つ的手段であることは確かであるから、そのかぎりでは、「労働者の個人的所有の再建」の過程は生産手段の「国有化」を含まざる

をえない⁹⁾が、しかしそれは、「国家」という名の「社会」による生産手段の掌握として、それ自体が「社会的所有」の実現であるわけでも、いわゆる「生産手段の社会化」であるわけでもないのである⁹⁾。いわゆる「現存社会主義」について、そこでは生産手段の「国有化」がなしとげられていたのだから、「社会的所有」が存在していたことは否定しがたいのであり、その意味でやはりなんらかの意味で「社会主義」だったのだ、とする議論が依然として横行しているが、この議論の誤りは、たんにその「党・国家」がじつはおよそ「社会」などではなかったのだ、だからこの「国有」は社会的所有からは遠く離れたものであったのだ、ということを見ないばかりでなく、より根源的には、「社会的所有」とは、本質的にはけっして、個人とは区別される「社会」なるものによる所有のことではないこと、実現されるべき新たな所有の要諦は「連合した社会的個人の所有」にあることに気づいていないところにあるのである⁹⁾。

- 1) この論争を概観するには、西野 勉氏執筆の「〈否定の否定〉〈個人的所有の再現〉」、講座『資本論体系』③、319-336 ページ、が有益である。
- 2) その意味で、筆者がかつて別稿で、「共産主義社会の本質的要件」の一つとして、次のものを挙げていたのは、正鵠を射ていたものと考えている。

「ここでは、一方では生産手段の私的所有一般がなくなっており、他方ではこのことによって社会の一部の構成員による生産手段の独占が廃棄されて、労働する個人が生産手段から切り離されている状態が消滅し、生産手段は、連合した生産者の共有〔*Gemeinbesitz, Gemeingut, genossenschaftliches Eigentum*〕となっており、彼らが生産手段を共同的に利用する、ということである。ここでは、いうまでもなく、労働力の商品化は完全に止揚されている。ちなみに、この共有が諸個人による共同的所有、連合した諸個人の所有であるがゆえに、マルクスは「個人による所有 *individuelles Eigentum* がふたたびつくりだされる」と言っているわけである。」（『現存社会主義』は社会主義か、『経済志林』第 58 巻第 3・4 号、1991 年 3 月、3-4 ページ。）

なお、『資本論』第 3 部第 27 章で、株式会社への生産の集中によって生産が「私的生産ではなくなる」ことが述べられているが、そこでも「所有」について、次のように書かれていることに注目されたい。

「資本主義的生産が最高に発展してもたらしたこの結果こそは、資本が生産者たちの所有に、といっても、もはや個々々々の生産者たちの私的所有としての所有ではなく、結合された生産者としての彼らによる所有としての所有に、直接的な社会所有としての所有に、再転化するための必然的な通過点である。」(『資本論』第3部。MEGA, II/5, S.502. 拙稿「資本主義的生産における信用の役割」の草稿について、『経済志林』第52巻第3・4号, 341ページ。)

ここでの「所有」が生産手段、生産諸条件についてのものであることは、言うまでもないが、ここでもまず、「結合された生産者としての彼らによる所有」と、所有の主体について言われており、そしてそのうえで、それが「直接的な社会所有」と言い換えられている。

類似の表現は、『1861-1863年草稿』の次の部分にもある。

「自由な労働が土台となることについて言えば、これが可能なのは、ただ彼らが彼らの生産諸条件の所有者である場合だけである。自由な労働は資本主義的生産の内部では社会的労働として発展する。だから、彼らが生産諸条件の所有者だということは、生産諸条件が社会化された労働者たちのものであって、彼らが社会化された労働者として生産を行ない、彼ら自身の生産を社会化されたものとして自分たちのもとに包摂するということである。」(MEGA, II/3.4, S.1523-1524. 『資本論草稿集』⑦, 517-518ページ。)

ここでも「所有」は、生産物の取得や生産物の分配・消費についてではなく、生産諸条件について、また、「社会化された労働者」というその主体に即して論じられているのである。

- 3) なお、この2箇所の「社会的所有」は、1887年の英語版では、前者が“social property”, 後者が“socialised property”となっている。
- 4) 『共産党宣言』では、「共産主義革命は、伝来の所有諸関係とももっとも徹底的な絶縁である」と言い、「プロレタリアートは、その政治的支配を利用して、ブルジョアからつぎつぎにすべての資本を奪いとり、すべての生産用具を国家の手に、すなわち支配階級として組織されたプロレタリアートの手に集中し、そして生産力の量をできるだけ急速に増大させるであろう」と述べた。軽率に読めば、ここで、いわゆる「生産手段の社会化」、すなわち生産手段の社会的所有への転化の具体的な形態としての「国有化」が述べられているように見えるかもしれない。しかし、第1に、ここでは国家が社会ではなく「支配階級として組織されたプロレタリアート」であること、第2に、この直前で、「労働者革命の第一歩は、プロレタリアートを支配階級に高めること」と言われている

こと、そして第3に、このすぐあとで、「もちろん、これは、最初は、所有権とブルジョア的生産関係とに専制的な侵害を加えることによってのみ、したがって、経済的には不十分で長続きしないと思われる諸方策によってのみ、行ないることであるが、しかし、これらの方策は、運動が進むにつれてそれ自身を乗り越えて進むのであって、生産様式全体を変革するための手段として、避けることができないものである」、と述べて、この国有化そのものが不可避の「過渡的方策」であることを明示しているのである。(マルクス・エンゲルス『共産党宣言』。MEW, Bd.4, S.481, 『マルクス・エンゲルス全集』第4巻, 邦訳, 494ページ。)

- 5) エンゲルスは、彼が「社会的所有」を「社会による所有」と理解していたのではないかと見られる記述を残している。これは、『反デューリング論』での、社会的所有－生産手段、個人的所有－生産物中の消費手段、というマルクス解釈と深く繋がったエンゲルス独自の「社会的所有」理解によるものではないかと考えられる。たとえば、『空想から科学へ』の第3節でエンゲルスは、「社会による生産手段の掌握」という表現を頻発している。

「社会以外のなにものの指揮の手にもおえないほどに成長した生産力を、社会が公然と、直接に掌握すること」、「プロレタリアートは国家権力を掌握し、生産手段をまずはじめには国家的所有に転化する」、「国家が真に全社会の代表者としてたち現われる最初の行為——社会の名において生産手段を掌握すること——」、「社会がすべての生産手段を掌握するということ」、「社会が生産手段を取得すれば」、「社会が生産手段を掌握するとともに」、「プロレタリアートが公権力を掌握し、この権力を用いて、ブルジョアジーの手からすべりおちてゆく社会的生産手段を、公共の所有に転化する。」(エンゲルス『空想から科学へ』。MEGA, I/27, S.619-625, 『マルクス・エンゲルス全集』第19巻, 邦訳, 219-225ページの各所。)

- 6) 『共産党宣言』では、「2 プロレタリアと共産主義者」の末尾を、次の2パラグラフで締めくくっている。

「発展がすすむなかで階級差異が消滅し、連合した諸個人〔die assoziierten Individuen〕の手に全生産が集中されたとき、公的権力は政治的性格を失う。本来の意味の政治権力は、他の階級を抑圧するための一階級の組織された強力である。プロレタリアートは、ブルジョアジーにたいする闘争のなかで必然的に階級に結合し、革命によってみずから支配階級となり、支配階級として強力を用いて古い生産関係を廃止するが、彼らは、この古い関係とともに階級対立の、階級一般の存立条件を廃止し、それによってまた階級としての自分自身の支配を廃止する。

階級と階級対立とを伴った古いブルジョア社会にかわって、各人の自由な発展が万人の自由な発展の条件であるようなひとつの協働連合〔Association〕が現われる。」(マルクス=エンゲルス『共産党宣言』。MEW, Bd.4, S.482, 『マルクス=エンゲルス全集』第4巻, 邦訳, 495-496ページ。)

筆者は、別稿で、この点について次のように述べておいた。

「国有・イコール・社会的所有ではない、ということは、すでにしばしば言われていることであるが、〈社会的所有〉、〈社会〉による所有という言葉も、ときとして誤解されているのとは違って、その場合の〈社会〉は、けっして国家のような、諸個人から超越する自立的なイデオロギー的存在ではなくて、それ自身が自覚した諸個人のアソシエーションなのであり、あるいはむしろ、連合した諸個人(assozierte Individuen)そのものである。ソヴェト的生産様式において、私的所有が止揚されてこのような連合した諸個人の所有が作りだされたとは、とうてい言うことができない。」(「現存社会主義」は社会主義か, 『経済志林』第58巻第3・4号, 1991年3月, 12ページ。)

5. 「物神崇拜の解消」

「もちろんそれと同時に、生産物は生産者の所有物なのだ、という物神崇拜はなくなり、資本主義的生産の内部で発展する、労働の社会的形態のすべてが、これらを歪曲して対立的に表わす対立から解放される。この対立は、たとえば労働時間の短縮を、全員が6時間労働するようになる、というように表わすのではなく、6人が15時間労働すれば20人を養うのに足りるようになる、というように表わすのである。」(覚え書)

覚え書の最後は、否定の否定によって成立する新たな所有形態のもとでは商品生産に固有の物神崇拜が消滅する、ということの指摘となっている。

「生産物は生産者の所有物なのだ、という物神崇拜」という一句で言わ

れているのは、「商品生産の所有法則の資本主義的取得法則への変転」によって、生産手段の所有者が「個々独立の労働する個人」から資本家へ変わっても、資本家が生産物を取得するのは彼が資本家的生産者であるからだ、という社会的承認＝法関係は依然として支配しており、労働の社会的生産力を資本の社会的生産力として現わすのも、こうした商品生産のもとでの「人格の物象化」による「物神崇拜」にはかならない、ということであろう。個人的所有の再建によって、このような物神崇拜も消滅する、というのがこの部分の主旨である。

最後に置かれたこの箇所も、きわめて示唆的であると考えられる。というのも、第24章第7節では、資本主義的所有から社会的所有への転化それ自体については述べられているが、この転化と物神崇拜との関連については、まったく触れられていないからである。この両者はじつはきわめて密接に結びついているのであって、そのような転化について論じるときには、この点についても論じる必要があることを、この箇所は示しているといえるであろう¹⁾。

- 1) 筆者は、1991年10月6日に経済理論学会大会の共通論題での討論のなかで、社会主義論と物神性論との関連について次のように述べた。

「共産主義社会は本来個性の前面的開花を実現する社会であり、それは全面的に発達した個人の存在を前提とし、この存在の形成が社会主義の究極的課題であると考えます。この低い段階も商品・貨幣なしに社会的生産を意識的・計画的に統御できる人間、そのような労働する個人の存在を前提とするのであり、社会主義建設とは究極的にはこのような人間の発達を実現することなのだと理解します。これをユートピアの考えとみるのは、共産主義の実現自体が資本主義社会の労働する個人の在り方の本質的止揚であり、この止揚なしには人類の本史が始まりえないことに気付いていないことによります。資本主義や現存社会主義の私たち自身の現実のなかに人間そのものの限界を見ることは、私たち自身の制限性に気付かないままその私たちを物産しにして人間を測ることに帰着します。そして逆に、現実の私たち自身のなかにある人間の無限の可能性を見ないのは、それを物象的システムに制約された諸個人の振舞いから区別できないからです。そ

れは物象的システムにおける人間の制約を理論的に自覚しないからであり、マルクスの資本の理論こそが私たちの現実そのもののなかに無限の可能性を読み取る手掛りを与えていると考えます。」(『市場と計画』(経済理論学会年報第29集)、青木書店、1992年、70-71ページ。)

マルクスは、『経済学批判要綱』のなかで、(人類の本史における)「個人や社会の自由で十分な発展」について、次のように述べている。

「実際には、偏狭なブルジョアの形態が剥ぎ取られれば、富は、普遍的な交換によってつくりだされる、諸個人の諸欲望、諸能力、諸享楽、生産諸力、等々の普遍性でなくてなんであろう？ 富は、自然諸力にたいする、すなわち、いわゆる自然がもつ諸力、ならびに、人間自身の自然がもつ諸力にたいする、人間の支配の十全な発展でなくてなんであろう？ 富は、先行の歴史的発展以外にはなにも前提しないで、人間の創造的諸素質を絶対的に表出すること〔Herausarbeiten〕でなくてなんであろう？
そしてこの歴史的発展は、発展のこのような総体性を、すなわち、既存の尺度では測れないような、あらゆる人間的諸力そのものの発展の総体性を、その自己目的にしているのではないのか？ そこでは人間は、自分をなんらかの規定性において再生産するのではなく、自分の総体性を生産するのではないのか？ そこでは人間は、なにか既成のものに留まろうとするのではなく、生成の絶対的運動の渦中にあるのではないのか？ ブルジョアの経済学では——またそれが対応する生産の時代には——、人間の内奥のこうした完全な表出〔Herausarbeitung〕は完全な空疎化として現われ、こうした普遍的対象化は総体的疎外として現われ、そして既定の一面的目的のいっさいを破棄することが、まったく外的な目的のために自己目的を犠牲に供することとして現われている。だからこそ、一方では、幼稚な古代世界がより高いものとして現われるのである。」(MEGA, II/1.2, S.392, 『資本論草稿集』②, 137-138ページ。)

マルクスはここで、ブルジョア社会における物象的システムによって制約された諸個人の振舞いから区別された、にもかかわらず現実のわれわれ自身のなかに潜んでいる、「生成の絶対的運動の渦中」にある人間の本性とその無限の可能性とを見ているのではないであろうか。これをリアリズムを欠いたユートピア的人間観だと嘲笑する人々にたいしては、マルクスとともに次のように言わなければならない。

「ブルジョアの所有の廃止の問題を、自由、教養、法などについての諸君のブルジョアの観念を基準にして判断するというやり方で、われわれに論争をしかけるのはやめたまえ。諸君の思想そのものがブルジョア的な生

産諸関係および所有諸関係の産物なのだ。……諸君の生産関係および所有関係は、生産の進展につれて過ぎ去ってゆく歴史的関係であるのに、諸君はそれを永遠の自然法則や理性の法則に変えているが、こうした身勝手な考え方は、諸君ばかりでなく、すべての没落した支配階級に共通するものなのだ。」(マルクス・エンゲルス『共産党宣言』。MEW, Bd.4, S.477, 『マルクス・エンゲルス全集』第4巻, 邦訳, 491 ページ。)

おわりに

以上、『1861-1863年草稿』のなかの一つの覚え書を見てきた。少なくとも、この覚え書が『資本論』第24章第7節の内容と深くかかわっていること、そしてまた、この覚え書が第24章第7節の内容の理解に大きな示唆を与えるものであることについては、十分にご理解いただけたものと思う。筆者としては、さらに進んで、「現存社会主義」における「国有」を「社会的所有」とし、そこから「現存社会主義」を「社会主義」だとする〈常識〉の根本的な再検討が開始されることを期待したい。

(1994年1月20日)

追記：本稿は、ある論文集のために執筆し、1993年8月18日に入稿したままとなっていた「『個人的所有の再建』と『社会的所有』について」と題する拙稿に若干の補筆を行なったものである。「独占研究会」で「ワーキング・ペーパー」としてお配りした前稿と論旨はまったく変わっていないが、前稿は廃棄することにした。